



日本福祉大学

国際福祉開発学部だより

News Letter

Faculty of International Welfare Development

August. 2019 vol.

13

〒477-0031 愛知県東海市大田町川南新田 229 日本福祉大学 国際福祉開発学部 <http://facebook.com/nfuiwd/>

目次

- | | |
|--|-------------------|
| P.1 2019 年度を迎えて | P.9 学部10周年記念事業の報告 |
| P.2 国際フィールドワークⅠの報告
(アメリカ、フィリピン、カンボジア、マレーシア) | P.10 学部の取り組みから |
| P.4 卒業生が伝えたい学部の学び | P.12 新任教員の紹介 |
| P.5 アクティブラーニング期間の学び | 国際開発同窓会の発足 |
| P.8 ワールド・コラボ・フェスタへの出展報告 | 学部の後期の主な活動 |

2019年度を迎えて

学部長 吉村 輝彦

2019 年度の入学式が東海市芸術劇場で開催されました。東海キャンパスの新生を代表して、本学部のラピアトゥル・ヒダヤさんは、「高校生の時に日本についての本を読んだことがきっかけで、日本に興味を持った。私の家はあまりお金がなく留学は無理だと諦めていたが、母が日本へ留学を応援してくれてうれしかった。将来は日本語教師になりたいと考えており、国際福祉開発学部はその目標に向けて勉強できるだけでなく、福祉や開発など人の幸せについての学びもできてびっくりだと思った。日本とインドネシアの架け橋になれるよう、勉強や様々な活動に一生懸命取り組んでいきたい」と決意を話しました。

「多文化共生社会を生きていく。」—— これは本学部での学びを通して育てていきたいことを表したものです。

日本は、多様な言語や文化が入り交じった多文化社会に向かう一方で、多文化が“共生”する社会と言うには、まだまだ多くの課題を抱えています。様々な課題に直面しながらも生きる人々へのボーダーを超えた支援。それは、一方的に何かを与えることではなく、地域の文化的背景を理解し、多様な価値観を踏まえ、問題とその解決策を共有し、協働しながら、人々が自立できるよう支えていくことにほかなりません。

多様な、あるいは、異なる価値観を前提とすると、日本語、英語他の言語や ICT（情報通信技術）等を活用したコミュニケーションのあり方が問われています。コミュニケーションを進める上では、他者に対する眼差しが大事になります。他者や異文化への理解を深めることは、多様な人たちの幸せを願う「ふくし」に通じます。また、世界各地の社会構造や文化・慣習の違い、あるいは、多様な価値観を理解していく力も不可欠です。そして、自分の中の「あたりまえ」を見直すと、世界が違って見えてきます。入学式直後の新生セミナーは、そんな多様性（diversity）が溢れるひと時でした。



国際フィールドワークⅠの報告

| アメリカ研修

担当教員 米津 明彦

アメリカで実感する文化の多様性

アメリカ班の16名は、ワシントン州バンクーバー市に2月10日から2週間滞在し、全期間ホームステイで過ごしました。現地の家庭生活を継続的に体験する中で、学生たちは英語での日常的なコミュニケーションを楽しみながら、生活習慣や考え方の違いを実感しました。

平日の午前中はクラークカレッジにて3時間の英語研修を行いました。コミュニケーション活動が充実し、キャンパス内の学生にインタビューをして結果をレポートするなど、英語を実際に使う経験を積み重ねました。

平日の午後には、カレッジで日本語を学んでいる学生たちとの交流、バンクーバー市庁舎にて市長表敬訪問、バンクーバー市の歴史施設見学、現地の高校生との交流、高齢者施設訪問、信越化学工業株式会社の海外ネットワークの一つ SEH America への企業訪問、そして、NBA 観戦など多彩な活動があり、毎日が新鮮な出会いの連続でした。

最終日には、全員がそれぞれの異文化体験をプレゼンテーション形式で発表し、研修の成果を報告しました。研修期間を通して、学生たちは多くの友人やアメリカでの家族を得て、多様な生活のあり方や学び方を発見しました。これからの交流の発展を期待しています。



| フィリピン研修

担当教員 佐藤 慎一

人々の目線で地域を見つめ直す

フィリピン研修のプログラムは、現地最高峰のフィリピン大学社会福祉・地域開発学部の教授陣によって企画・立案・実施されています。今年のテーマは、「開発を庶民目線で見つめ直す」と設定されました。政策から現場への影響まで、すべてに通じた専門家により組まれたプログラムだけあり、「開発」による恩恵を受ける立場、逆に被害を受けてしまう立場の両面から深く考えさせられる充実した研修となりました。

プログラムは、講義と組織訪問が有機的に組み合わせられており、＜講義＞→＜関連の組織訪問＞→＜振り返り＞という一連の流れに沿って学びを深めていきました。講師陣は一線で活躍する方々ばかりですが、どなたもフレンドリーで、学生が発言しやすいような「空気」をうまく作ってくれます。学生たちも、自ずといつも以上に積極的になり、授業・訪問先活動に主体的に関わっていました。

今回の研修では、特に、開発による負の影響を受けてしまっている方々との直接対話が印象深いものでした。タガログ語の通訳を介しながらも、生死にも関わ



るような壮絶な体験には大変な迫力があり、皆の真剣な眼差しが印象的でした(写真上)。そのような中でも、未来を担う子どもたちはいたって元気。どこにいてもプログラムの合間には、子どもたちとの楽しい交流が絶えませんでした(写真下)。

カンボジア研修

カンボジアの農村地域の日常をまるまる体験

2018年度は、クラチェ州というカンボジアの中心にある農村地域での生活体験を中心とした研修になりました。全体のスケジュールはCRDT (Cambodia Rural Development Tours) という非営利団体が組み、最初のプノムペンのキリング・フィールドと虐殺博物館や最後のシエムリエブのアンコール・ワットの訪問に挟まれて、1週間ほどメコン川の中州に位置するクラチェ州ワット村でホームステイをしながら、村の生活をあらゆる側面から体験しました。クラチェ出身のカンボジア人ガイド2人と一緒に自転車で移動しながら、農家やお寺などを訪問したり、地元の子供達とメコン川で遊んだり、カンボジア語の授業を「青空教室」で受けたり、地元のお母さんたちとお菓子を作ったり、イラワディ・イルカの保護地区をボートで訪ねてイルカに会ったりすることによって、カンボジアのゆっくりと流れる時間と穏やかな田舎生活をフルに体験しま

講師の方々からは、「何でもスポンジのように吸収・学び取ってくれた」、「研修の中で発言の質がどんどんと良くなってきた」といった評価をいただきました。参加者はすべて1年生。今後3年間、どんな学びを繰り返してくれるかが楽しみです。

担当教員 カースティ 祖父江

した。ワット村を離れる時間になったら、研修メンバーとホームステイのホストファミリーの方々全員が涙を流しながら別れるほど、みんなにとって一生忘れられない素敵な体験になったと思います。一緒に行った学生がこれからその経験をどのように活かせるかを見るのがとても楽しみです。



マレーシア研修

異文化交流を通じた相互理解

マレーシア研修は17名というこれまででもっとも多い人数の学生が参加して実施されました。受け入れは例年と同じくペナン島にあるマレーシア科学大学(通称USM)。そして、今年も国際交流クラブの学生たちがバディ学生として2週間の研修期間中ずっと我々の相手となって付き合ってくれました。本研修の一番の目的が、参加学生が異文化をもつ彼・彼女たちとどのように交わるかということですが、これは十分に果たせたように思います。

プログラムの目玉がホームステイです。以前はいくつもの地域にバラバラに散らばってステイしていましたが、去年からは一つの集落に固まって行動するという形態になって、学生たちにとっては「楽になった」ようです。その他、企業や社会活動団体等への訪問もあって、興味深かったのはハラル食品をグローバルに推進する州政府機関への訪問でした。マレーシアはイスラーム諸国の中でこの分野では力を入れている代表国ですが、それをペナン州政府が担っている。我々の訪問の2週間後には、ハラル推進の世界エキジビションも開催されることになっていました。

宿泊は日本のビジネスホテルと同じタイプで、キャンパスまで車で数分、徒歩でも15分という近さで

担当教員 斎藤 千宏



す。その地域にはB級グルメで有名なベナン島らしく、食べ物の店が多数あり、また車で10分のところにはイオンモールもあって、学生たちはバディ学生と一緒に

に頻繁に訪れていました。日常生活面では、日本の暮らしとあまり変わらないこの2週間だったと思います。

卒業生が伝えたい学部学び

国際福祉開発学部卒業生 崔 炯根 (Hyungkeun Choi)

私は、4年間の大学生活を振り返ってみると、自身に3つの変化があったと思います。

第一に、物事を「常に全体像を考える人」になりました。国際福祉開発学部は、国内を含め、海外の学生や先生、職員が多くいる学部です。大学が、毎日「大学内で異文化」を体験することができる場でした。個性も強く、優しい人々との話し合いの中で、それぞれの暮らしや文化、価値観が存在することに気づきました。その中で「自分以外」の世界はどうなるのか、また、自分以外の相手のために何を配慮する必要があるのだろうかということを常に考えて行動する人になりました。

第二に、「能動的であり主体的に発信する人」になりました。国際福祉開発学部は、「教育系」や「開発・支援系」の授業が中心です。しかし、みんながそれだけを語るわけではありませんでした。例えば、ファッションや音楽、ゲームなどの「趣味系」を語る人も多くて、みんながそれを否定せず、『面白い!』と興味を持って聞きました。その環境が自分にも安心ができ、何か自信を持って発言ができる、面白い発想ができるようになりました。自分も「趣味系」に近く、「日本の観光地域を回ること」が好きで、観光を福祉で結びつけた「地域を救う観光まちづくり」の活動に関わり始めました。

第三に、「自らを振り返り、気づける人」になりました。国際福祉開発学部は、フィールド（現場）での自発的な活動を促しています。自分自身が何か関心を持ち、何かやろうと思えば、想いを必ず聞いてくれることから始まりました。例えば、自分は、観光まちづくりの成功事例が知りたくて、「高山」で1ヶ月間調査活動をしました。それに向けて、先生を含め、周りの学生が計画書や報告書などの準備を手厚くサポートしてくれ、また、意見をフィードバックしてくれました。そして、現地活動は行いました。ひたすら、住民と何かを話す、様子を観察する、調べる、気づくプロセスを自分一人で繰り返しました。多くの試行錯誤もありましたが、自分は活動を通して、自分の発見や発言で周りを気づかせる力がある、留学生である自分でも何かを変化させる力があることに気づきました。

国際福祉開発学部に入ろうと考えている高校生の皆さん、国際福祉開発学部は、多様性のある人の集まり、様々な考えや話を聴いてくれる「場」が多くあります。英語や常識が足りなくて心配な人もいるかもしれません。まずは自信を持って、自分から「場」で、失敗や恥を恐れず話しかけよう！関係がなくてもなんでも関わろう！という想いからスタートしましょう。そうすると、自分の関心／きっかけが見えてきて、関心に向けて行動を移す自分が見つかるはずですよ。



アクティブラーニング期間の学び

カナダでの語学研修

私は、2019年2月23日から3月24日まで、2年生のゼミ担当のGary先生の助言を受け、カナダのThe University of British Columbiaにて、1ヶ月間の語学研修プログラムに参加しました。私は高校の頃から海外に研修に行くことが多くありましたが、どれも2週間程度であったため、もう少し長い期間留学をしたらさらに充実した経験ができると考えました。

カナダでの生活を始めた頃は、日常的な買い物をする場面でも思うようにコミュニケーションが取れず、自分の英語力が十分ではないと実感しました。しかし、どんな状況でも英語を話さないと始まらないため、普通に生活している中でも次第に英語を使うことに慣れてきました。1ヶ月後には周りの人が話している英語をほとんど把握できるようになり、確かな成長を感じることができました。さらに、この研修プログラムでは、各週にテーマが決められており、そのテーマに応じてディスカッションやプレゼンテーションを行い、課外活動で実践することもできました。細かな文法の学習ではなく、英語特有のアクセントなどには気を付けながら、失敗を恐れずにひたすら英語を話すことでコミュニケーション力を伸ばすことができました。

このアクティブラーニングでは、英語以外にも貴重な体験をして、カナダの文化を学ぶことができました。バスに乗っていた時には、優先席を必要としている人にしっかりと譲っている様子を見て、当たり前のことではあっても私は感動し、日本との文化の違いを感じました。そして、道を尋ねたときも優しく教えてくれるなど、カナダの人達は心が温かくて優しいと感じました。

韓国での国際シンポジウムでの発表

私は、2018年11月に、韓国の全南大学で行われた国際シンポジウムに参加しました。「デジタル学習における新技術」を全体テーマに、私のグループは「思いやりマインドを育成するためのVRの可能性」についてポスタープレゼンテーションという形で発表を行いました。内容としては、VRを利用して第3者の立場をできる限り同じ目線で体験することで、被験者が第3者の気持ちを考え、思いやりを持つことができるのかを調査しまとめたものです。この発表をするにあたり、学内で学生にVRを体験してもらい、アンケート調査なども行いました。全南大学の学生との交流やポスタープレゼンテーションならではの質問や会話から改めて自身の英語力の課題を確認できました。

国際福祉開発学部 3年 山口 美穂

最後に、このアクティブラーニング期間を有効活用することでいろんなことに挑戦することができ、キャンパスの中だけでは学べないことや感じられないことを学ぶことができました。この経験を活かして再度留学に行ってみたく強く思いました。



国際福祉開発学部 3年 大西 暁博



イギリスでの語学留学

私は、2019年2月24日から5月19日まで、イギリスのロンドンへ語学留学に行きました。まず、私がなぜイギリスを選んだのかというとアメリカ英語とイギリス英語の違いを実際に現地に行って身をもって確かめたいと思ったからです。

学校では2つの授業を午前と午後に分かれて受けました。午前の授業では日本と同じで文法を学び、午後の授業ではリスニングやスピーキングを学びました。一つ一つのクラスが小さくて生徒の数も少ないので先生との距離も近く、わからないところがあれば簡単に質問することができ発表がしやすい環境だと感じました。

学校では毎日ソーシャルプログラムが準備してあって、そのプログラムに参加することでクラスメイト以外の生徒とも交流をすることができました。他にもカフェテリアや図書館が学校内に設置しており、生徒が充実した学校生活を送れるような設備も備わっていて、ほぼ毎日放課後などで使用していました。

また、イギリスにいた間はホームステイをしました。ホストマザーは働いていて忙しく、一緒にどこか

国際福祉開発学部3年 車田 真依

へ行くことはありませんでしたが、毎日夜ごはんと一緒に食べ、本当のお母さんと話すかのようにその日の出来事を話しました。イギリスの母の日にはホストマザーにサプライズで手紙を渡しました。多くの時間は一緒にいれなかったけど、マザーと過ごした毎日私にとって忘れられない思い出になりました。



ベトナムの日本語学校でのインターンシップ

私は、2019年4月3日から5月25日まで、ベトナムにあるHIKARI日本語学校でインターンシップを行いました。インターンでは、日本の大学に行きたいと思っている人や日本で将来働きたいと思っている人に日本語を教えました。

初めの5日間は授業の見学をし、先生がどのように授業を進めているのかを学びました。その後、実際に自分が前に立って授業を行いました。初めはとても緊張していたため、声が無意識に小さくなっていました。しかし、1日2日過ぎると慣れてきて、生徒とも一緒に生活していくうちに仲良くなり、授業もやりやすくなりました。授業では、文法やリスニングを主に行いますが、文法を教えるのにとっても苦戦しました。先生にもできるだけ分かりやすい日本語を使うこと、黒板に絵を描いて説明すると分かってもらえやすいと言われました。私はそのアドバイスをもらった後、次の日のために予習をしました。分かりやすい日本語で説明できるように調べ、また、多くの例文を考える努力をしました。その結果、前回よりは分かってもらえ、練習問題もすらすら解けていました。私は自分が教えたことが理解してもらえたことが嬉しかったです。インターンシップを通じて学んだこととして、母語を教えることは思っているより難しいと感じました。日

国際福祉開発学部3年 東城 姫佳



本語を教える中で、どのように日本語を学んでいるかを理解していませんでした。例えば、「この文を読んでください」と私は言いましたが、生徒は、「～ください」という文を習っていなかったため、「この文を読んでください。授業を行っていくうちに気づいたため、自分はまだまだ学習が足りないと感じました。こうした反省点を活かすことで、生徒にどんどん分かってもらえるようになっていきました。自分が教えたことを使っている姿をみてとても嬉しかったです。そういう達成感を味わうことの大切さを学びました。

カンボジアでの教育支援活動

国際福祉開発学部 3 年 河田 未玖

私は、EDU-port という教育支援活動プロジェクトの一員として、カンボジアに行きました。滞在期間中はカンボジアの学校に訪問し、デジタルコンテンツを使用した英語学習の普及に努めました。

中でも、教員養成学校（Provincial Teacher Training Collage）での活動は鮮明に覚えています。そこでは1日に2～3時間ほど時間をもらい、小学校教諭を目指す学生たちに向けて授業を行いました。プロジェクターでスライドを映し出すと、学生はノートを片手に興味津々で私の動きを見ていました。この学校にはもともとプロジェクターがありましたが、授業で使われることはほとんどありませんでした。そのため学生は私の動きを細かく確認しノートに記録していました。授業中もビデオに合わせて歌ってくれたり、説明がクラス全員に伝わらなかった時は学生がクメール語に訳してくれたり、彼らの優しさと熱意に心を打たれ、私自身も彼らに寄り添った授業をしたいと考えようになりました。そこで、小グループをつくり、各グループにパソコンを置き、学生が先生になって授業を行う形にしました。すると授業に参加しづらかった後ろの学生も前の席の学生と同じ量の学びを得ることができました。また、ノートに記録して覚えるのではなく、経験して身体で覚える環境をつくることができました。活動も終盤になると、私が提示したテンプレートに、学生自身がアレンジを加え、「小学校の生徒が楽しんで授業を受けるにはどうすればよいか」「効率よく理解させるにはどうすればよいか」を自ら考え



るようになりました。

私の今回の活動の目標の1つに、自分たちの力でICT教育ができる環境をつくるというのがありました。自分が表現したいこと、伝えたいことがより相手に届く方法を見つけ、それを行動に移すことができたのは、私にとって大きな成果でした。取り組みを通して、都市部と農村部の教育格差や教育機会が与えられていても受けられない子ども、プロジェクターがあっても教え方が分からない教員が多くいることなど、教育に関わる課題が見つかりました。今回の経験を生かし、常に自分が表現したいことの何%を相手が理解しているのかを考え、そして、より良い方法が見つければ積極的に行動に移したいと思います。

フィリピンでの様々な体験

国際福祉開発学部 3 年 内藤 萌菜

私はアクティブラーニング期間にフィリピンに2回行ってきました。

1回目は、ミンダナオ国際大学で自分の英語力を高めるために英語の授業を受け、また、日本語学部日本語学専攻の日本語のクラスでインターンシップをしました。英語の授業では、基礎の文法や接続語や発音について学びました。日本語クラスのインターンシップでは、生徒に交わりながら授業を一緒に聞くのが中心でした。1度だけ自分が授業をする時間をもらい、授業をしました。どのような流れにしたら生徒さんを楽しんでもらえるかなど考えるのが大変で、準備をしている時にプレッシャーに押しつぶれそうになった時もありましたが、生徒が盛り上げてくれたこともあり、何とか無事に終えることができました。

2回目は、インターネットで見つけた日本人女性が行っている NGO に、1週間スタディツアーで参加



し、NGO が支援している地域の問題の現場に見学に行ったり、ホームステイをしました。その後インターンシップを行いました。

ワールド・コラボ・フェスタへの出展報告

2018年11月10日（土）に開催されたワールド・コラボ・フェスタ2018に、国際福祉開発学部としてブースを出展し、在学生がスタッフとして活躍しました。ワールド・コラボ・フェスタとは、『持続可能な社会の実現のため、中部地域の国際交流・国際協力・多文化共生の活動を広げ、市民、NGO・NPO、企業、行政が協力して「学び、考え、行動する場」をつくりあげる』をテーマにしたイベントです。本学部は、「What in the World ?! 世界につながる私たち」をテーマに、出展しました。

ここでは、参加した学生の感想を紹介します。

「初めての参加でしたが、自分の体験談を共有することで相手が興味を持って話を聞いてくれたことや、普段は聞けない実は身近で活動していた国際組織／活動団体があったりと、とても充実した楽しい時間を送ることができました。

また、ブースを出展する側として、どのように学部での活動についての情報を相手に伝えられるのかを考える機会となりました。足をとめてくれた方に短い時間で多くのことを伝えられるような企画を今後考えていきたいと思いました。」

「準備期間当日ともにとても勉強になるイベントでした。

準備では初めて大きなパネルを作りました。私たちの学部の魅力でもあるフィールドワークをどのように魅力的に伝えることができるか、分かりやすく伝えられるかをメンバーと考え、そこでたどり着いたのが雑誌の特集ページにあるようなインタビューコーナーや最後のページに必ずある占いコーナーを意識したデザインでした。多くの企業やNGO団体が出展する中で、学生からみたグローバルに対するリアルな考え方を魅せることができたと思います。

当日は国際福祉開発学部を宣伝するだけでなく、世界に関心を持ち、活動をしている様々な人々の思いを知ることができました。気になったのは着実に日本語教育が広まっているということです。あたりを見渡すと、学習支援を目的としたブースややさしい日本語を紹介する学生の姿が見られました。私たちの学部も日本語教師育成プログラムがあり、多くの学生が興味を持って取り組んでいるので、次年度はそうした面でも学部をアピールしていけたらと思いました。

今、大学で国際協力、異文化理解、福祉開発など世界に焦点を当てた学びを行っていますが、それでもまだ知らない世界は多くありました。新しいことを知るということは自分の可能性を一つ広げることにもなるので、来年はもっと多くの学生が足を運んで欲しい



と感じました。自分も今回の活動のように、学生が成長できる活動をしていきたいと思いました。」

「今回参加することで、海外の様々な文化や日本国内外で行われている活動について触れることができ、非常に有意義な時間を過ごせたと感じています。私たちのブースにも100名を超える人が訪れてくれてうれしく思いました。私たちが作った国際フィールドワークⅠのボードにも興味を持ってくれる人がいて、不慣れながらも説明するのが楽しかったです。しかし、質問されたことに対して十分に答えられていたとは言えない部分もあったので今後の活動ではそのようなことがないように、自分の学びに責任と自信を持って取り組んでいきたいと思いました。もしまたこのような機会を貰えたら今回以上に誠心誠意取り組みたいです。」

本学部は、ワールド・コラボ・フェスタ2019にも出展する予定です（2019年10月12日のみ）。

学部10周年記念事業の報告

| 学部10周年記念公開講演会及びフォーラム (2018年10月28日)

担当教員 吉村 輝彦

講演会で、原田さとみさんは、フェアトレードやエシカル・ファッションのセレクトショップ「エシカル・ペネロープ」を名古屋テレビ塔に構え、エシカルの理念の普及とともに、貧困削減・環境保護など地球につながるフェアトレードの推進にチャレンジしてきた自らのこれまでの取り組みを振り返りながら、「社会へダイブする」ことの大切さを語りました。講演では、人生の節目節目には様々な転機があり、自ら動いていくことで切り拓かれていく場面を紹介しながら、今までの当たり前を見つめ直すことの大事さを強調されました。さらに、フェアトレードタウン活動でのビッグ・テント・アプローチ、すなわち、多様なフェアトレードのあり方を包み込む「大きなテント」方式を紹介し、これからの多文化共生社会に構築に向けて多くのヒントをいただきました。

フォーラムでは、福祉経営学部国際福祉開発マネジメント学科及び国際福祉開発学部の卒業生からこれまでの取り組みやこれからの抱負が語られ、原田さとみさんとともに、これからの生き方、働き方、社会への関わり方を考えました。卒業生からは、それぞれ、在学中の学びから卒業後の取り組みまでこれまでの学び



や働き方が話され、折々に新たなチャレンジをしている様子が共有されました。卒業生の話からは、それぞれが以前から持っていた夢、これまでに培ってきた得意なこと、そして、社会に対する問題意識がそうしたチャレンジの背景となっていることが伝わってきました。原田さとみさんからは、まさに、社会にダイブしている！とのコメントがあり、社会変革のソーシャルワーカーそのものではないかと確認できた一時でした。

| 学部10周年記念日越国際シンポジウム (2018年10月29日)

担当教員 カースティ 祖父江

ハノイ大学日本語学部の学部長のギエム ホン ヴァン先生と副学部長のグエン ラン アイン先生を招き、ベトナム人に対する日本語教育や現在日本にいるベトナム人の現状を学ぶシンポジウムを行いました。

最初に、ヴァン先生からハノイ大学の日本語教育について基調講演を聞き、ハノイ大学が取り組んでいる日本語教育、卒業生の進路や現在日本語教師の不足から生じている課題について伺いました。その後、ランアイン先生、愛知県で多文化ソーシャルワーカーとして活動されている神田すみれ氏や「研修生」として日本で働く経験があるグエン ホン クアン氏とで、「日本にいるベトナム人の現状と課題」をテーマにパネルディスカッションが展開しました。クアンさんから「研修生や実習生は日本にいる間に日本語をしっかりと学ぶとその先のキャリアに繋がられるので、日本語教育はとても大事だ」というコメントをいただき、また、神田さんからは「定住している外国人に一番必要なのは日本人の間での話し相手。違いにコミュニケーションができれば、違いにいろいろ生活のストレスが解消される」という話を伺い、今後、日本人と定住外国人がしっかり話し合えることの大切さを感じました。ま



た、ランアイン先生からは、「ベトナム人が日本から学びたいことがとても多くあるけれども、日本に来て大変な状況におかれて頑張っているベトナム人が多いから、みなさん応援してほしい」という、大切なメッセージを会場に伝えてくれました。そして、地域の日本語教育関係者、地元の企業を運営している方々、ベトナムとなんらかの関係がある方々が多く集まり、会場が満席となり、質疑応答と交流時間では活発な意見交換が行われました。

ふくし AWARD2018 の報告

2019年1月29日（火）に、学内プレゼンテーションコンテスト「ふくし AWARD 2018」が開催され、応募 55 作品の中から最終審査に残った 8 作品（英語部門 4 作品、日本語部門 4 作品）のプレゼンテーションが行われました。本コンテストは、「地域に根ざし、世界を目ざす『ふくし』の学びを伝えよう！」をテーマに、学生が正課内外の地域活動を通して学んだことや考察したこと、授業の一環や個人の関心により調査したことなどを発表するものです。本学部の学生は、英語部門、日本語部門で高い評価を受けています。

詳細は、以下をご覧ください。

「ふくし AWARD 2018」を開催しました」

(<http://www.n-fukushi.ac.jp/news/18/190206/19020601.html>)



インターンシップ報告会

2018年11月15日（木）に、夏季休暇期間中にインターンシップに参加した学生の報告会が実施されました。

「インターンシップⅠ・Ⅱ」は前期科目として開講され、前期期間中に研修前の講義が行われ、夏季休暇期間中に学生がそれぞれの研修先でインターンシップに臨みます。2018年度は、国際福祉開発学部、経済学部から 80 名以上の学生が授業を履修、インターンシップ報告会には 62 名の学生が出席しました。また、当日はインターンシップで学生を受け入れた企業等から約 30 名の方に参加していただきました。

報告会当日は、国際福祉開発学部の学生は司会者や発表者として活躍しました。発表者は研修内容や学んだこと、感じたことなどを緊張しながらもしっかりとプレゼンテーションを行いました。5日間または10日間の短期間でのインターンシップでしたが、「他者



への気配りや相手の気持ちになって考えることが大切だと感じた。」「一つ一つの行動に対する『責任』について社会人と学生での重みの違いを実感した。」など、机上では学びきれないことを学び、感じ取ることができるとても貴重な機会になりました。

2019年度オープンキャンパス（2019年7月21日）の報告

2019年7月21日に、東海キャンパスにおいて、オープンキャンパスが開催されました。学部のセッションには、日本人に加えて、多くの留学生が来てくれました。

この日は、在学生や教員による本学部での学びの紹介に加えて、青年海外協力隊の任期が終わったばかりの卒業生が駆けつけてくれました。近年、卒業生の中から、青年海外協力隊へと関心を寄せ、チャレンジする人が増えてきています。



ノーステキサス大学との交流の報告

国際福祉開発学部 1 年 坂下 瑞萌

今回、ノーステキサス大学の日本語を勉強している学生と交流する機会をいただきました。一緒にご飯を食べて折り紙で鶴を折ったり、輪投げをして遊んだり、お互いどんな大学生活を送っているのかを情報交換したり、日本の歌と一緒に歌ったりしました。たった3時間ととても短い時間での交流でも、まるで一日一緒に過ごしたかのようなとても有意義な時間でした。だから、最後のお見送りの時はとても悲しかったです。その日の夜に連絡先を交換した数名の子から「本当に楽しかった。ありがとう。」と日本語で連絡が来ました。日本に滞在する日にちのうち、私たちと交流した時間はほんの一瞬に過ぎません。それでも、東海キャンパスで過ごした時間が大切な思い出のひとつとなったことはとても嬉しいことです。

私はこの交流会を通して、チャレンジすることの大切さを学びました。英語で話すことを恐れている私に対して、ノーステキサス大学の学生は日本語で話すことを恐れませんが、分からないことがあればすぐに誰かに聞く、という姿勢に感動しました。また、昼食で箸を使っていることに驚きました。話を聞いてみると、前々から箸を使う練習をしてきたということです。これこそまさに「郷に入れば郷に従え」ということではないかと感じました。だから私もチャレンジすることを肝に銘じて勉学に励みたいと思います。



留学生との学び

国際福祉開発学部 事務長 中嶋 浩貴

2019年4月より国際福祉開発学部には多くの留学生が入学しました。国別の内訳は、ベトナム、ネパール、中国、インドネシア、スリランカです。多くの留学生が母国で6ヶ月～1年間かけて日本語を学び、日本の日本語学校に2年間在籍した後に本学部に入學しています。「多文化共生」を掲げる本学部らしく、日本人学生と留学生が互いの文化を尊重し、共に高め合う姿勢を貫くことで教育・研究のグローバル化に貢献しています。特に留学生が難解な日本語に苦労しながらも懸命に授業に取り組む姿勢は日本人学生に対して非常に良い刺激になり、日本人学生の「海外にて挑戦したい!」という意欲が年々向上しているのを肌で感じています。例えば、学部内で一番の在籍者数を誇るベトナム人学生との交流を通じて、日本人学生のベトナムに対する興味・関心が増した結果、ハノイ大学日本語学部や日本福祉大学ベトナムオフィス内にあるHIKARI日本語学校での日本語教師インターンシップ

希望者も増えています。今後も「多文化共生」学部として、卒業後にグローバルな舞台で活躍できる人材の輩出を目指し、精進していきます。



本学に入学した留学生の歓迎交流会の様子
(本学部に加えて他学部への入学生や在学学生も参加)

新任教員の紹介

国際福祉開発学部 近藤 有希子 助教

はじめまして。この2019年4月から日本福祉大学の国際福祉開発学部へ赴任しました、近藤有希子と申します。私は2010年より、アフリカ大陸の中東部に位置するルワンダ共和国に毎年通っています。これまで通算24か月ほどをルワンダで過ごしていますが、滞在期間中の多くは、ある農村の一家族の家に寝泊まりさせてもらいながら、人類学的な調査をおこなってきました。一緒に農作業をして汗を流し、収穫を喜びながらともに食し、家族の成長と誕生を祝福し、ときに親しい者の死を悼む——そのような循環に私自身も巻き込まれていくなかで、その地で生きていくための知恵や術を教えてもらうのです。そしてこの過程において、「他者」は見ず知らずの者ではなく、次第に私の知人や友人になって、ほかでもない家族のような存在になっていきました。

さて、いままたこうして新しい土地にたどり着き、みなさんとともに在るなかで、これからどのような関係性が築かれていくのだろうか、まずはゆったりと身を委ねてみているところです。



国際開発同窓会の発足

国際開発同窓会 会長 丹羽 俊作（国際福祉開発学部第1期生）

国際福祉開発学部の歴史は、福祉経営学部国際福祉開発マネジメント学科及びその前身である経済学部経営開発学科に遡ることができます。その20年近い歴史の中で、多くの学生が「国際」「福祉」「開発」といったキーワードのもと学内外での学びを深め、社会へ羽ばたいていきました。こうした卒業生の活躍の場は、日本国内に留まらず、世界各地へと広がっています。

そうした中、2018年は、国際福祉開発学部設立10周年という記念すべき年となり、学部の主催で多くの記念行事が開催されました。こうした行事は、現役の

学部生や卒業生、教員、さらに、登壇したゲスト講師らが語り合う素晴らしい場となりました。

こうした国際福祉開発学部と前身の福祉経営学部国際福祉開発マネジメント学科、そして、経済学部経営開発学科のネットワークを在学生、卒業生、教職員に活かしてもらうことを目的とし、国際開発同窓会を発足いたしました。

本同窓会は、「国際」や「開発」「福祉」をキーワードとした取り組みを展開しつつ、同窓会ネットワークが卒業生の国内外での活躍に貢献することを目指しています。

学部の後期の主な活動

- 10月 2020年度ゼミオリエンテーション
ワールド・コラボ・フェスタへの出展（10.12）
オープンキャンパス（10.20）
Global Lounge ハロウィン企画
国際フィールドワークⅠ国内研修開始
- 11月 2年生アクティブラーニング活動期間開始
- 12月 4年生卒業論文提出及び卒業論文発表会
Global Lounge クリスマス企画

2020年

- 2月 国際フィールドワークⅠ（フィリピン、マレーシア、カンボジア、インド、日本）
- 3月 学位記授与式（3.20）
オープンキャンパス（3.22）
在学生オリエンテーション

発行人：日本福祉大学 国際福祉開発学部

〒477-0031 愛知県東海市大田町川南新田 229

TEL. 0562-39-3811 FAX. 0562-39-3281

編集人：国際福祉開発学部 学部長 吉村 輝彦

問合先：国際福祉開発学部 事務室（kokusai@ml.n-fukushi.ac.jp）

国際福祉開発学部 ブログ



フェイスブック

